NO. 52
March '12
Kewsletter
神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

本学“なでしこ”への非女性学的なオマージュ

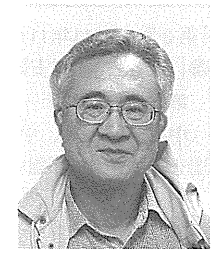
濱　下　昌　宏

いまだ男社会と言われる日本において、じつは日本女性は強いのか、それとも女性たちのただの被害妄想にすぎぬのか…。私は毎年、新ゼミ生へのアンケートで、「次に生まれるとしたら、男性、女性のうちどれを選ぶか？」という設問を用意するのですが、問いに対して圧倒的に「女性」を選ぶ学生が多く、そこで欧米の友人たちはその回答結果に興味を示します。欧米のフェミニズムはマッチョ男性支配の社会背景があります。ところが、近年は必ずしも「女性」を選ばずに「来世は男に」という学生が我がゼミ生の中にも少しずつ増えています。西欧でのフェミニズムも成果を挙げつつあり、女性大臣が目立つのはスペインだけではないようです。J. S. ミルの名著『女性の解放』（岩波文庫、ほか）の原題は「女性の隷従（subjection）」ですが、本学の女子学生のたくましさは男性からの隷従などはじき返す馬力を感じさせてくれます。

ミルの上記の本が世に出たのが1869年（日本では明治維新の翌年）ですから、たしかにイギリスは女性差別への警鐘を鳴らした先進国でありました。ミルが指摘するのは、男性による女性支配の基礎にある暴力と感情論、女性は能力欠如という偏見、結婚における法律上の不備・不平等、などの問題点、さらに、知的分野・独創性を男性が占有している現状批判、男女平等の機会を与えることによる社会の発展や公共道徳の充実の可能性について、等々についても周到に議論しています。

そもそも日本文化の基礎は女性性にありそうです。天照大神や卑弥呼やらの神話や伝承に見るだけでなく、世界文学に属する『源氏物語』や『枕草子』などの女性作家たちを例にとっても、日本女性のめざましい活躍は古くからありました。それらが書かれた11世紀という時代を西洋の同時代と比較しても、日本女性の能力発揮は日本をたいした文明先進国、女性を自由に活躍させた意外な国という評価へと高めてくれます。ＮＨＫのいわゆる大河ドラマでも、「篤姫」や「江」といった女性は魅力的に描かれ、龍馬や清盛はカメラ撮影の演出過剰にも問題がありますが、某県知事ならずとも「汚い」と酷評したくなります。

私はゼミの最初に脳の活性化のために順番にトピックの提供をさせて議論を始めます。彼女たちが口にするのは他愛もないといえばそれまでですが、たとえば「最近私は大食で夕食の後も夜中の12時にコンビニで弁当を買って食べ、さらに午前３時頃にはまた空腹を感じておむすびを食べたりする、どうも満腹感がない」、「夜、布団に入っても寝つけない、眠っても夢ばかり見る」、「シューカツと授業とバイトの三つ巴の生活の中でどうしても授業は平気でサボってしまう、そんな自分を何とかしたい」、等々、私生活と学生としての心がけと、揺れる思いを率直に語ります。


濱下昌宏 教授

本学のレディ（の卵？）たちは、この世の生を享受しているように見えますが、それが自分の才能であるかのように振舞っています。かつて、今を去ること20年ほど前にゼミ旅行で東京に寄った際、以前出講していた大学の卒業生たちといわゆる合コンをしたことがありました。東京には数多くの女子大があり、女子学生は珍しくないにもかかわらず、参加した東京在住の男性たちは「神戸女学院の学生は一味ちがいますね」と言っていました。その理由は説明しがたいのですが、たぶん「男性に媚びない」「自立心と矜持」「対等の主張」といった精神によるのでしょう。好悪の感情を備えて自分の背丈で判断する能力を持っている、と言ってもよいでしょう。もっとも、そうした女学院生も、じつは今日では減ってきているように思えてなりませんが。

そうした女性像を「学」にするのは、攻撃的批判的革命的フェミニズムとは趣旨がことなるでしょうが、しかしアフロディテ＝ヴィーナスや大地母神、マリア崇拝、弁財天信仰、特殊にみえますが関東地方の女体社（牛山佳幸『[小さき社] の列島史』、参照）等々の女神信仰のイメージを人類文明史にさかのぼれば、それらがたいていは男性からの論弁であっても、女性を謎と神秘として畏敬・畏怖しつつ対処しおうとする意思の伝承を感じます。スタンダール作品に出てくるヒロインのように荒ぶった態度で情熱恋愛をする、理解を超える女性イメージを抑えるための知恵だったようにも思えます。（もっとも、実態はただのお転婆娘かも…。）

私も本学に奉職させていただいて、女性「学」に関わることができました。『女性学評論』にも数回寄稿させていただき、集成として『妹の力とその変容』を2002年に出版できたのも本学に勤めた成果です。その本の帯に「女性への畏怖と敬意」と付けました。マス・メディアに群がっている男性（とくにおジイちゃん）視線の「ミスＸＸ」や「かわい子ちゃん」の虚像とはまったく別のところに、女性の魅力がある筈です。女学院生は、ときに私には同じ言語を話す別の人種と思わせますが、男も世間も恐れずに自分の人生を芸術作品のように創っていくという、本学の伝統をこれからも受継いでいって欲しいものです。

（文学部教授：美学）

連続セミナー
「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」

【第３回：2011年11月４日】……石川康宏

●「私たちは『慰安婦』問題をどう考えるか」

第３回のセミナーでは、３年ゼミの４名の学生たち（中村静香さん、中田亜佑さん、砂原詩帆さん、植田瑞季さん）が、「慰安婦」問題についての学びを紹介してくれました。2011年６月の東京学習旅行、９月の韓国学習旅行という２つが中心的なトピックスです。

「慰安婦」制度について、国連はじめ国際社会は日本軍性奴隷制という呼び名を定着させてきています。それは、幼い少女を含む数万から十数万の女性を、日本兵が継続的にレイプしていく制度でした。戦時でも政府と軍が公的にそうした行動をとったのはナチス・ドイツと日本しかなく、現存する軍資料の限りでは、1932年に上海につくられた「慰安所」が最初です。

「慰安婦」被害者は、東アジアをはじめ各地に存命ですが、日本社会はこれを戦後補償の対象としておらず、そのため、今も外交上の重要案件となっています。世界的な戦時性暴力克服の取り組みとかかわり、近年では、欧米諸国からも批判が高まっています。

６月の東京旅行では、かつての戦争を違った角度から見つめる３つの資料館に学びました。「慰安婦」問題を専門とする「女たちの戦争と平和資料館」、明治以降のすべての戦争を正しいとする「靖国神社・遊就館」、深刻な障害を負った元日本兵の戦中・戦後を記録する「しょうけい館」です。ここでは「戦争」をその時代を生きずにおれなかった生身の人々に、寄りそって理解することの大切さを痛感していました。

９月の韓国旅行では、性奴隷についての世界最初の資料館である日本軍「慰安婦」歴史館や、1919年に「３・１独立運動」の起点になった場所であるタプコル公園、植民地時代の生々しい歴史資料を展示する西大門刑務所を見学しました。また「慰安婦」被害者本人ともお会いし、彼女たちが日本政府に問題解決への誠実な姿勢を求める「水曜集会」の現場にも立ち会いました。

学生たちにはすべてが「衝撃的」で、その場では状況を整理できない瞬間もありました。しかし、帰国後、時間をおいて振り返ることで、受け入れるべき事実、検討すべき課題、日本の市民としてとるべき行動など、次第に頭の整理がついて、これらの体験を学外で語るようにもなっていきます。

セミナー当日は予定の時間をずいぶん余してしまいましたが、それも緊張のための他に、学生たちが体験を納得のいく形で消化する途上にあることを示すものでした。話しを聞いてくださったみなさん、ありがとうございました。　（文学部教授：経済学）

【第４回：2011年11月11日】……北川将之

●「インド体験学習で学ぶ」

総合文化学科３年の専攻ゼミの学生９名が、2011年９月に行われたインド体験学習プログラムで学んだことを発表した。このプログラムは、インド南部の都市バンガロールに滞在しながら、現地のカトリック系大学St. Joseph College of Commerceの協力のもとで、インド社会が抱える諸問題を学ぶものである。2010年度から数えて２回目となる。

連続セミナーの発表では、訪問先の施設とそこで学生が感じたことが日程順に紹介された。第一に、路上で生活する子ども（ストリートチルドレン）を保護する施設BOSCOでは、中学生の年齢の男の子３名に直接インタビューを行った。本学学生は、彼らが「一番大切にしているもの」は「機会」であるという話に深く考えさせられたようだった。第二に、身体的・精神的障害をもつ子どもを預かるマザー・テレサ関連施設では、自分で食事をすることができない子どもたちに流動食をたべさせたことが紹介された。学生たちは子どもの頭を膝の上に置き、話しかけながらスプーンを使って１時間近くかけて食事の介助を行った。学生はそのとき膝の上に子どもの体温を感じ、この流動食が食べられないようになると、この子の命が奪われてしまうのであり、「生きる」ことを肌身で感じ取ったという。生きるとは相手に存在意義を与えあうことであり、学生たちは食事を与えられる側の子どもから「いのち」の温もりと尊さを教えられた。

第三に、インドに進出している日系企業を訪問して、そこで働く日本人の社員の方々からインド特有の仕事術について話を聞いた。ソニー・ソフトウェアセンターでは、高度IT技術の専門家が次々と転職してしまうのを防止するための手厚い福利厚生について学んだ。トヨタの部品工場では、日本人がインド人に技能を伝える際に、トヨタの考え方を徹底して学んでもらうシステムが導入されていることが紹介された。また、カップラーメンの製造・販売を行っている日清では、現地の好みの味付けや販売促進の方法で、インドの事情に適応した工夫が求められているという。

最後に、中国からインドに政治亡命したチベット難民の大学生たちが暮らす学生寮では、子どもの頃にヒマラヤ山脈を徒歩で越えてインドに亡命してくるまでの経緯、あるいは、大学を卒業した後の進路など、様々なトピックに関する話し合いが行われた。学生たちは、チベットの大学生が故郷への強い愛着を抱いていることに触れ、自分自身の文化的アイデンティティーについて考えさせられる機会になったという。

（文学部専任講師：国際関係論）

学外講演会

【第1回：2011年10月6日】……白井由美子

●「なぜ つまずいてしまうのか？
—Be動詞—」

中学校、高校で英語を6年間勉強してきたにも関わらず、なぜ学生は基本のbe動詞を間違えるのかということを疑問に思っていた。そこで実際の間違いを彼らの答案から集め、どのような間違いをしているか分析した結果を報告した。当日は、今回対象となった学生のレベルの紹介、be動詞をどのように教えたか授業内容とその進め方、学生の英作文における間違いとその解釈・説明、今後のための指導方法、質疑応答という順序で進めていった。今回の対象学生は、英語に対して苦手意識の強い学生が中心である。入学時、be動詞も一般動詞も全て混同している状態にあった。授業では一般動詞から教え、その働きを定着させてからbe動詞に入るという順序をとった。文法用語は一切使わず「誰が、どうする、何を」を徹底して教えた。be動詞を教える段階でもbe動詞の働きを説明し、「どうする」という一般動詞との違いを分からせるよう努めた。しかし学生の英作文に間違いは見られた。その間違いを分類した。①be動詞と一般動詞を一緒に使っている、②be動詞をいれるのを忘れている、③be動詞の使い方を間違えている、④存在を示すbe動詞としてみなしていない、⑤単純な使い方の間違い、⑥be動詞は使えているのに他が間違っている、の6種類である。間違いの理由は大きく分けて二つある。一つは日本語の干渉。もう一つは英語の規則の過剰使用。例えば③の例として、「姉は熱があります」という日本語を英語に直す問題で、「ます」の部分に注目し、本来ならばhasを使うところisを選んでしまった間違い。また、問題文には「私はサンドイッチが欲しいです」と書いてあるのに、「私はサンドイッチ（にする）」という日本語で注文する時の表現をあてはめてwantは使わずにbe動詞を使っている誤答もあった。ここでは日本語の感覚を使う、日本語を忠実に英語に訳そうとする等、日本語の干渉が見られる間違いを紹介した。また、①に関しては、大学の授業ではまだ受動態等は習っていないが、中学、高校で習った文法規則を当てはめてしまった学生もいて、ここには英語のルールの過剰使用がみられることを報告した。しかし、まだ基本的に一般動詞とbe動詞の違いが分からず一緒に使ってしまったという間違いもここには含まれる。②については形容詞を動詞と勘違いしたためbe動詞を入れない間違いも見られ、品詞についての理解不足もあらわになった。このようにそれぞれの間違いには意味があり、そのつまずきの解決策となるための授業方法を最後に考えて終了した。　（文学部専任講師：英語科教育法）

【第2回：2011年10月13日】……Fukushima Marcelo

●「日本の国際貿易のあり方
—強まるアジアとの相互依存関係—」

2008年のリーマン・ショック以降、世界中の金融システムが混乱に陥り、各国経済に大きな打撃を与えた。先進諸国が第二の大恐慌時代に突入したといわれるほど、景気低迷、財政赤字、大量失業等の問題が深刻化している。日本は、世界経済からの影響の他、人口減少や高齢化等の構造的な問題も抱えており、安定成長のために新しい国家戦略の模索が急務である。

冷戦後、イデオロギーの対立による世界の二極化が解消され、規制緩和・小さな政府・市場経済・自由貿易を基軸とする「新自由主義」が唯一の経済思想として生き残り、「民主主義」と「人権」と合わせて、世界を動かすイデオロギーのTrinityとなった。冷戦の終焉により、世界中に経済の改革や自由化が進み、1980年から2000年にかけて、発展途上国を中心に様々な経済危機が起こり、その主な原因は、発展途上国の財政運営の脆弱性にあった。先進国が発展途上国の資金不足を補う構造が存在し、経済危機の救済の際、先進諸国は発展途上国に財政規律や金融システムの再編等、厳しい条件を課した。その結果、2000以降先進国の資金を必要としない発展途上国の健全な財政バランスが実現し、さらに冷戦後の貿易自由化により世界市場が急拡大し、世界経済は著しく成長するようになった。本来発展途上国の財政赤字を支える先進諸国の資金は、世界の金融市場へ流れ、加熱を引き起こす。米国で始まった金融危機が世界へ広がり、やがて経済危機を招き、現在の先進諸国の財政危機につながった。

しかし、いわゆる新興国のBRICs国（ブラジル、ロシア、中国、インドの略）や他の発展途上国は、強い国内需要と健全な金融システムを基盤に成長をし続けている。新興国が世界経済の成長を牽引し、先進国の成長を回復させるカギであるといわれている。特に中国とインドの成長が著しく、賃金や生活水準が上昇し続けているため、世界中の企業にとお手魅力的な市場として認識されようになった。

そんな中、日本経済の目は欧米諸国からアジア諸国へとシフトしつつある。日本の輸出の大半は、輸送機械、電子機器、化学製品等の工業品で構成され、その主な輸出先はアジアである（中国18.88%、米国16.42%、韓国8.13%、台湾6.27%等）。一方輸入の主な品目は機械、燃料、食料、化学製品等で主な貿易相手は中国（22.2%）、米国（10.96%）、オーストラリア（6.29%）、サウディアラビア（5.29%）、UAE（4.12%）、韓国（3.98%）となっている。貿易の中身を見ると日本にとってアジアはもはや「生産拠点」から「消費市場」へと大きく変化しつつある。経済危機や地域自由化が深化する中、日本とアジアとの相互依存関係がますます深まっているが、過度にアジアへの依存度が高くならないように、日本の通商戦略として貿易相手を多様化することが重要になってくる。　（文学部専任講師：国際ビジネス論）

授業「女性学」の紹介

「女性学（実践編）」

米田眞澄

女性学（実践編）では、４人の講師がオムニバス形式で授業を行っています。全体のテーマは女性に対する暴力です。ここでは、私が担当している授業の内容について紹介したいと思います。

最初に学生たちに話すのは、戦前の女性の地位がどれだけ低かったかということです。その代表が、女性に参政権がなかったことです。また、明治民法下では、女性は婚姻して妻になると、法律上は無能力者となり、法律行為には夫の許可が必要でした。刑法の姦通罪も、妻の貫通は犯罪であり、１年以下の懲役でしたが、男性は相手に夫がある場合のみ姦通罪が成立するという不平等な規定でした。

次に、女性に対する暴力が国際問題として取り上げられ始めたのが、1990年代になってからであることを話します。1990年といえば、今の学生たちが生まれた頃です。冷戦後の旧ユーゴスラビアの内戦は有名ですが、そこでは、強姦が「民族浄化」の一つの手段としてなされました。紛争下における女性に対する暴力です。これは、第２次世界大戦中の日本による「従軍慰安婦」問題にもつながります。

1993年６月にウィーンで世界人権会議が開催されたのですが、その会議で最も注目されたのが、女性に対する暴力でした。1993年12月には、国連総会で、女性に対する暴力撤廃宣言が採択されました。つづく1995年には北京で第４回世界女性会議が開催されましたが、ここでも女性に対する暴力は、重大関心領域の一つに位置づけられたのでした。

このような国際社会の動きを受けて、日本でも1996年に策定された男女共同参画2000年プランのなかで、初めて女性に対するあらゆる暴力の根絶が国の施策として掲げられます。1997年には男女雇用機会均等法が改正され、使用者に対してセクシュアルハラスメント防止配慮義務が課せられます。そして、2000年にはストーカー規制法が、2001年にはDV防止法が制定されてきいきます。このように話していくと、学生たちは女性に対する暴力の根絶に向けての法律や施策が比較的最近のことであることに気がつき、驚いたという感想を述べてくれます。

授業では、今では多くの電車でみられる「女性専用列車」は、女性だけを優遇していて逆差別だという意見も聞かれるが、どう思うかをたずねます。「女性専用列車」は、2002年に大阪市営地下鉄の御堂筋線での導入が最初だと言われています。なぜ、御堂筋線なのでしょうか。それは、大阪地下鉄の痴漢の被害届けの70％が御堂筋線だからだという理由もあります。しかし、それだけではありません。「女性専用列車」を設けるまでには女性たちの運動がありました。

1988年11月に御堂筋線で痴漢にあっている女性を助けようとして、二人組の痴漢を注意した女性が、その痴漢たちに連れ回されて強姦されたという事件が発生したのです。痴漢は逮捕され、３年６ヶ月の実刑となりました。この事件をきっかけに女性たちが集まり、女性が安全に利用できる公共交通機関の実現を求めて、通勤通学電車を利用する女性たちにアンケートを実施して、その結果をもとに痴漢対策を要求してきたのです。

2000年から大阪市営地下鉄での痴漢防止対策が始まりますが、最初のポスターは「チカンはアカン」というものでした。今では「痴漢は犯罪です」というポスターや車内アナウンスが流れるようになっています。御堂筋線の女性専用列車は終日となっています。DV防止法もそうですが、その制定には女性たちの運動があることを学生たちに伝えたいと思っています。

女性に対する暴力についての近年の動きを言えば、2005年に刑法に、人身買い受け罪・売り渡し罪が新設されたことです。日本は2004年から人身取引対策に取り組み始めています。これには、2000年に国連総会で採択された人身取引防止議定書が影響しています。この議定書は、２つの目的ともっています。ひとつが人身取引を防止し、根絶することです。もうひとつが、人身取引の被害者を保護し、支援することです。人身取引の被害者数は2001年から統計がありますが、2009年までで551人もの被害者が確認されています。しかし、実際の被害者はもっとたくさんいることが推測されています。人身取引の問題については、講義の他に、DVDも教材に使っています。学生たちは興味深く講義を聴き、DVDを観て、感想をたくさん書いてくれるのがありがたいです。

（文学部准教授：法学）

「女性学（理論編）」

井　上　紀　子

私が担当させていただいています女性学（理論編）は‘女性とからだ’をテーマとしています。（貴女の心とからだの声に耳を傾けてみませんか）を副題として互いに学び、理解していくことを目的としています。女性の性をもって生まれた女の子が、初潮を迎え第二次成長をしている現在、学生生活を終えて、社会人として巣立っていく直前に、多くのからだへの疑問やからだからのサイン等、人間的にも成長記にある学生たちとしっかり向き合い、多くを語る中で互いにこたえをみつけあっていきます。

第１回目の授業では、「自分の健康は自分で創る」「自分の健康は自分で守る」の思いから、自分自身を愛していますか、自分が好きですか、現状を認めていますか、と問います。身体の問題は心の問題といっても過言ではなく、多くの不満や無関心が病気を発症させ、ダイエットに走る心をつくっています。自分自身の不満ばかりが頭をよぎり、どうしていいのかわからない…と訴える学生に、学生たちのからだの疑問や悩みを記名した質問用紙記入の形式で受け取り、次回からの授業にいかしていきます。

第２回目、第３回目の授業は、１回目の授業で質問されたからだへの不安や解決方法をゆっくり丁寧に学生に伝えていきます。もちろん、教員の経験や女性の先輩として話のできるからだの問題を交えながら、授業を進めていきます。出産という大事なできごとを考えると、大学生の抱える問題は本当に多く、未来の見えない現在のからだでも多くの問題を抱えているのに、出産までのプロセスは想像でしかありませんが、からだは１つです。今現在のからだへの知識不足や、認識不足で産めないからだにしてはいけない。と話していきます。産む・産まないは選択できますが、産めないからだは健康上もよくありません。

生活習慣を見直し、学生が持っているからだへの知識を増やし、間違った点は修正し、改善して欲しいと願い、学んでいきます。

健康教育は大変難しく、行動変容が起こるまでのプロセスは、学生自身が納得して行動するしかありません。

学生からの相談には医師が応えていく内容も多々あるため、保健室と相談しながら、本学で勧めるレディースクリニックを紹介しています。

心豊かに、学生生活を送り、充実した日々を過ごすための知識の習得になることを願っています。

女性が女性であるために、母親が伝えてきてもよい「性教育」が今現在なされているはずなのですが、学生たちは本質的に学びたい部分は違う様です。自分自身のからだの変化をしっかり認識できる大学生だからこそ、女性学（理論編）の授業が学生たちの想いに響いていっているのではないでしょうか。

女性が健やかに生きるということは身体的、精神的ならびに社会的に良好な状態であることが大切だと思います。この授業を通して、自身と向き合う時間をからだの状態と向き合う時間としてほしいものです。自分自身を愛し、からだの変化にも気がつき、学習することにより、より健康なからだを築く、そんな授業であってほしいと思っています。

（体育研究室教授：体育学）

授業「女性学」について

女性学の授業は、現在、「実践編」と「理論編」のふたつの科目が開講されています。それぞれ定員を設け、前期あるいは後期に履修する形式です。

2011年度、授業をご担当いただきました先生方を担当順にご紹介します。

Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」
米田眞澄准教授、亀井明子非常勤講師、野澤萌子非常勤講師、長野理恵子非常勤講師

Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」
渡部充准教授、井上紀子教授、手嶋昭子非常勤講師、堀江有里非常勤講師

「実践編」「理論編」とも、担当者は３回程を個人で受け持ち、そのほかに担当者全員による総括をおこないます。女子学生の日常生活にとって身近な問題を取り上げ、考えさせ、理解を深めることを通じて、よりよい学生生活を送れるよう指導しています。

冠婚葬祭とジェンダー

奥　田　紗史美

普段はあまり意識しないようなステレオタイプな性役割が、幸福の典型として示される場面というのがたまにある。ときに冠婚葬祭がそれである。

祖母の葬式では、棺桶の遺体を綿で作った綿帽子で飾るというサービス（？）があった。あちらで待つ祖父に再び嫁入りするということらしい。当時はうっかり感動してしまったこのサービス、今思うと案外シュールである。そもそも祖母が死してなお、祖父に嫁入りしたいと思っていたかどうかなど、実は誰にも分からない。聞けば金輪際嫌だと言うかもしれないではないか。もしかして、死者が生涯独身だった場合、「せめてあの世では嫁にいって、今度こそ幸せにおなり」とでも言うのであろうか。余計なお世話である。

また最近、披露宴で「ファーストバイト」なるものが行われるのをご存じであろうか。新郎新婦がウエディングケーキを食べさせあうこの余興、新郎は一生食べさせてあげる、新婦は一生美味しいご飯を作ってあげるという意味があるのだそうだ。昭和が終わってもはや20年以上経つというのに、かくも時代錯誤な余興が流行するとは甚だ驚きである。などと意地悪なことを思うのは、式場内で私一人かもしれない。

ともあれこういう場合、参列者がとるべき態度はただ一つ、見て見ぬ振りである。棺桶の中の綿帽子をひっぺがすわけにはいかないし、よもや人様の披露宴で「ヨコ文字の割に、やっていることは結構古い」などと、口が裂けても言ってはいけない。綿帽子の祖母に涙し、幸福な新郎新婦に拍手を送るのみである。結局のところ、これらの目的は場を盛り上げることなのであるから、そこで水を差してはいけないのである。

冠婚葬祭はそれ自体が儀式であり、形式が定まっているものゆえ、ステレオタイプと相性がよいのもあるいは当然かもしれない。これらのイベントは、死者を送る、結婚を披露するというその場にふさわしい情動を、参加者に喚起させる為の装置なのである。そこでジェンダーが云々というのは野暮というものであろう。

ただし私には、皆が盛り上がるその横で、多少の違和感を覚える自由もまた、必要なのである。

（人間科学部専任講師：臨床心理学）

「女嫌い」について

榎　田　雅　祥

女性学インスティテュートへの寄稿にこのような題で書くことには多少の顰蹙は覚悟の上である。しかし私の愛読する作品の著者のほとんどが「女嫌い」を自認する作家達なのであえてこのテーマを取り上げてみた。

萩原朔太郎は「女嫌いの本体とはあまりに女性を高く評価している者が経験の幻滅によって導かれた不幸で馬鹿正直なロマンティストに過ぎない」と看破している。しかし一口に女嫌いと言っても様々なタイプが居り、事はそれほど単純ではなさそうである。

シェークスピアの戯曲やソネット集に現れる女性観はかなり懐疑的である。ハムレット３幕でオフィーリアに投げつける「尼寺へ行け～」のくだりは狂気を装ったハムレットの台詞だとしても作者の本心からほとばしる迫力がある。同じイギリスの風刺作家ジョナサン・スイフトの代表作「ガリヴァー旅行記」で最後の旅－理想のユートピア・馬の国－から故郷に帰ったガリヴァーが妻に抱きつかれ悪臭とおぞましさに卒倒してしまう場面は噴飯物である。また彼は幾つかの女性醜悪詩を残しているが中でも「淑女の化粧部屋」は女性の外見の美しさがいかに不潔な物と場所から作り上げられるかをスカトロジカルな描写によって鼻をつまずには読めない内容の作品になっている。

19世紀の象徴派の作家達、中でもボードレールは「悪の華」や手記において女性の現実的で形而下的な思考法に辟易する。「女は魂と肉体を引き離すことができない。」「女は自然的である、つまり忌まわしい。」等々。彼らは自然の花を愛さない、観念の中の花を愛するのである。

日本人作家で女嫌いの筆頭は三島由紀夫であろう。彼は、女々しさ、感傷、意地悪さ、狡さ、等、女性の属性をことごとく芸術の堕落の要因と見なし嫌悪する。「女性は抽象観念と無縁の徒である。～透明な抽象的構造をいつもべたべたな感受性でよごしてしまう。」

とはいえソクラテスの妻クサンティッペならずとも、ひねもす抽象の世界に遊んでいるぐうたら亭主の頭にバケツの水を浴びせたくなる気持ちも分からぬでもない。ソクラテス曰く「良妻を持ったものは幸せになれる。悪妻を持ったものは哲学者になれる。」と。

（音楽学部教授：フルート）

2011年度 活動報告

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

5月	**特別講演会 「神戸女学院大学生気質の変遷」**
	5／27（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者：谷 祝子 名誉教授 参加者：160名
6月	**連続セミナー「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」（全4回／6月・11月開催） JD-104**
	6／10（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：金田知子 文学部 准教授） 第1回 「エチオピア体験学習での学び、そして今 —子どもの教育と女性の生活を中心に—」 報告者：石井亜紀子 氏（神戸女学院中高部職員） 南 佳枝 氏（京都大学大学院研究科学生） 出席者：一般15名、学生9名 計24名
	6／17（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：北川将之 文学部 専任講師） 第2回 「住居建築ボランティア」 報告者：ボランティアサークル部員学生、現地参加本学学生 出席者：一般14名、学生11名 計25名
10月	**学外講演会（全2回） 西宮市大学交流センター（西宮北口 ACTA東館6階）**
	10／6（木） 10:30～12:00 第1回 「なぜ つまずいてしまうのか？ —Be動詞—」 講演者：白井由美子 文学部 専任講師 出席者：一般9名、学生7名 計16名
	10／13（木） 10:30～12:00 第2回 「日本の国際貿易のあり方 —強まるアジアとの相互依存関係」 講演者：FUKUSHIMA Marcelo 文学部 専任講師 出席者：一般15名、学生0名 計15名
11月	**連続セミナー「アジア・アフリカに学ぶ神戸女学院生」（全4回／6月・11月開催） JD-104**
	11／4（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：石川康宏 文学部 教授） 第3回 「私たちは『慰安婦』問題をどう考えるか」 報告者：石川ゼミ学生 出席者：一般9名、学生5名 計14名
	11／11（金） 14:00～15:30 （コーディネーター：北川将之 文学部 専任講師） 第4回 「インド体験学習で学ぶ」 報告者：北川ゼミ学生 出席者：一般11名、学生12名 計23名

■学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」
	インターディシプリナリー・プログラム 修了証交付：4名
7月	第13回「女性学インスティチュート賞」 学生懸賞論文（締切：2011年7月8日） 3編応募。最優秀賞・優秀賞ともに該当なし。

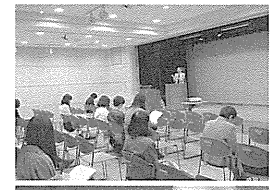
■発行物

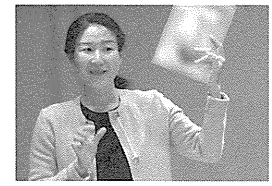
10月	newsletter №51 発行
3月	newsletter №52 発行
	『女性学評論』第26号 発行

お知らせ

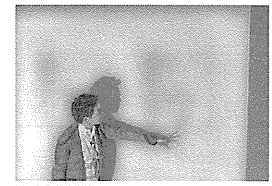
女性学インスティチュートのホームページがリニューアルしました。
http://www.kobe-c.ac.jp/gender/
ご活用いただけると幸いです。
今後ともよろしくお願いいたします。

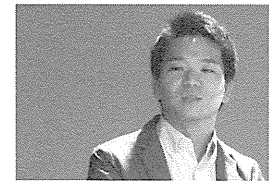
<10/6 学外講演会 第1回>



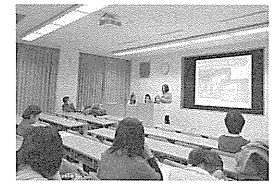


<10/13 学外講演会 第2回>





<11/4 連続セミナー 第3回>



<11/11 連続セミナー 第4回>

2012年度 スケジュール

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	**特別講演会**　＊申込不要
	4／27（金）　10:35～11:25（神戸女学院講堂） 濱下昌宏 名誉教授　「三美神をめぐって」
5月 6月	**連続セミナー　テーマ「文学の中の女 ―歩く女―」(全4回) JD-104　＊要申込**
	第1回　5／25（金）　14:00～15:30 吉田純子 文学部 元教授 「浮遊する日系少女」
	第2回　6／1（金）　14:00～15:30 孟　真理 文学部 教授　「越境する言葉と身体 ―多和田葉子をめぐって」
	第3回　6／8（金）　14:00～15:30 藏中さやか 文学部 教授 「阿仏尼『十六夜日記』の世界」
	第4回　6／15（金）　14:00～15:30 飯田祐子 文学部 教授　「モダンガール、歩く」
10月 (予定)	**学外講演会（全2回）　西宮北口　ACTA東館6階）**
	日時未定(平日10時半～12時の予定)。詳細決定後、ホームページなどで告知します。

■学生対象プログラム

年間	**授業**　＊人数制限あり。登録時、要確認
	Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 （米田眞澄准教授、亀井明子非常勤講師、野澤萌子非常勤講師、長野理恵子非常勤講師） Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」 （井上紀子教授、渡部充准教授、林葉子非常勤講師、堀江有里非常勤講師）
	インターディシプリナリー・プログラム
	【申込締切】〈前期〉2012年4月25日（水）　〈後期〉2012年10月17日（水） ＊対象科目は、Universal Passportを確認してください。 ＊申請用紙は、女性学インスティチュートにあります。
7月	第14回「女性学インスティチュート賞」 学生懸賞論文
	【対象】 在学中　および　2011年度卒業の本学学部生・大学院生が執筆した「女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文」 【締切】 2012年7月6日（金）　【選考結果発表】 2012年10月（予定） 【表彰】「最優秀賞」1編（賞金5万円および賞状） 「優 秀 賞」2編（賞金2万円および賞状） 【論文発表】『女性学評論』第27号に、最優秀論文全文、優秀論文要旨、掲載予定。 ＊募集要項は、女性学インスティチュートにあります。

「連続セミナー」について

つぎのいずれかの方法でお申込みください。

【往復はがき】

往信の文面に、
①「氏名（ふりがな）」
②「郵便番号」
③「住所」
④「電話番号」

返信の宛名面に、ご返送先の「郵便番号」「住所」「氏名」をご記入の上、下記宛ご送付ください。

〒662-8505 西宮市岡田山4-1
神戸女学院大学
女性学インスティチュート
連続セミナー係

【メール】

件名に、
「女性学Inst.
連続セミナー（申込）」
本文に、
①「氏名（ふりがな）」
②「郵便番号」
③「住所」
④「電話番号」
⑤「メールアドレス」
を明記の上、下記宛ご送信ください。

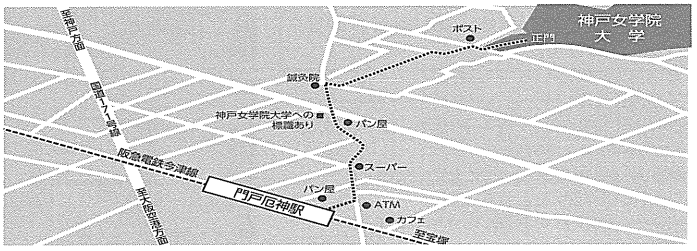
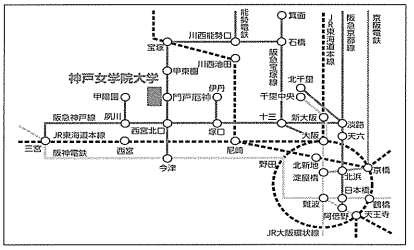
神戸女学院大学
女性学Inst.事務局
wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp

定員：50名（先着順）

締切：2012年5月11日(金)必着

＊本学学生は、直接、女性学インスティチュートまで、申し込んでください。

■発行物

10月	newsletter №53　発行
3月	newsletter №54　発行
	『女性学評論』第27号　発行

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティチュート
編集委員：飯田祐子、井上紀子、津上智実、米田眞澄（委員長）
編集事務：藤谷悦子、吉永真理子（ABC順）
〒662-8505 西宮市岡田山4-1　TEL 0798-51-8545　FAX 0798-51-8527
URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/　e-mail : wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp